

(公印省略)
三市史第3号
令和8年8月1日

各 区 長 様

三木市市史編さん室
室長 清原 久美子

『市史編さんだより』の回覧について（依頼）

晩夏の候、皆様には、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
平素は、本市の市史編さん事業に格別のご理解とご協力を賜り厚く
お礼申し上げます。

このたび、『市史編さんだより』第20号を発行いたしました。
つきましては、ご多用中とは存じますが、貴自治会の皆様でご回覧
いただきますようよろしくお願い申し上げます。

【お問い合わせ先】)

総務部市史編さん室 担当：廣井、清原
〒673-0432 兵庫県三木市上の丸町4番5号
三木市立みき歴史資料館2階 市史編さん室
電話(0794) 83-1120 Fax (0794) 83-1190
E-Mail:shishihensan@city.miki.lg.jp

(回覽杵)

[illegible]

市史編さんだより 第20号

発行 令和8年5月31日

『文化遺産』編発刊記念講演会&蓮花寺見学会を開催しました。



講演会（上）と対談（下）の様子

『新三木市史 第七巻 資料編 文化遺産』の発刊を記念して、令和8年3月14日に講演会「蓮花寺の寺宝からひもとく三木市の文化財」を開催（於：口吉川町公民館）し、その関連イベントとして、5月16日に「蓮花寺の寺宝見学会」を実施しました。

蓮花寺は、県指定有形文化財の銅鐘（貞和2年・1346年）や、市指定無形民俗文化財の鬼踊りでも知られる口吉川町のお寺です。

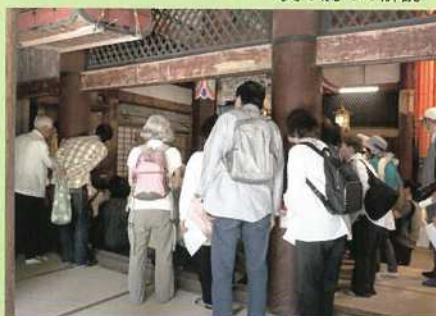
講演会では、三木市史通史編専門委員会の文化遺産部会長内田俊秀氏に、蓮花寺を中心とした三木市の文化財についてお話いただきました。また、ゲストスピーカーとして蓮花寺住職の密祐浩氏にもご登壇いただき、蓮花寺の歴史をお聞きした後、対談の時間を持ちました。当日は44名の皆様に聴講いただきました。

5月16日には密住職のご好意のもと、蓮花寺本堂の法道仙人立像、奥の院の十一面観音坐像、庫裏の菅野繁谷作「松に孔雀図襖絵」を特別に公開していただきました。

まずは全員で本堂にある蓮花寺開山の法道仙人の



奥の院での解説



本堂での見学の様子



庫裏での解説

像（貞享2年・1685年）を、文化遺産部会員神戸佳文氏の解説で拝観しました。その後2班に分けて、一つの班は三木市で一番大きな仏像である奥の院十一面観音坐像（室町時代）を同じく神戸氏の解説で見学しました。もう1班は、庫裏にて「松に孔雀図襖絵」（嘉永4年・1851年）を、文化遺産部会員の橋本寛子氏の解説で拝見しました。「松に孔雀図襖絵」は、迫力ある松の大樹と美しい羽が特徴的な孔雀がバランスよく配置されています。間近で素晴らしい造形を見学することができました（その後奥の院と庫裏の班を入れ替えて見学）。

『神戸新聞』にイベント案内が掲載されたこともあり、110名もの多くの皆様に参加いただきました。初夏の爽やかな空気の中、緑豊かな蓮花寺を散策しながら、貴重な文化財の一端に触れることができました。（関山）

《市史の窓》表も裏も重要史料～佐野区有文書の調査から～

細川・佐野区有文書の調査の過程で、珍しく、かつ貴重な史料が見いだされました。それは、1枚の和紙（継紙）の表裏両面に、それぞれ別のかなり重要な史料が記されていたものです。

和紙に認められる文書では、紙の表側に文字が記されると、裏側に文字が記されることはあまりありません。しいていえば、村が差し出した願書などに領主が何らかの回答を裏側に書き記したものを返したり、年貢を納めた結果を書き上げて村が提出した勘定目録という文書の裏に、たしかに年貢が皆済（上納完了）されたことを書き付けたりすることがあるくらいで、最初から1枚の紙の表裏両面に書き綴っていくということはありません。もちろん紙は貴重だったので、文書の用途が完了し反故となると、紙の裏側が再利用され、私的な文書（日記など）の用紙や下書、習字などに使われることはありました。

今回見いだされた佐野地区の文書は、恐らく最初から表裏に書き付けるつもりで作成されたと考えられますが、表裏いずれも原本というべきものではなく、写本や下書きのレベルのものです。しかし、内容がどちらも重要なものだったのです。

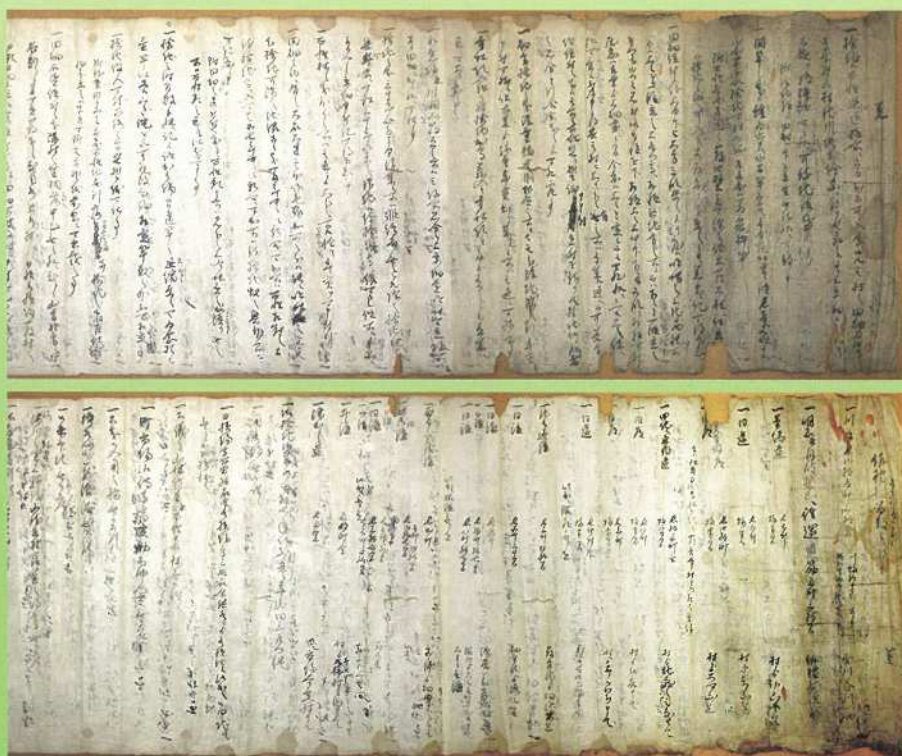
まず表側（いずれが表、裏ということではないのですが、仮に）には、延宝5年（1677）の「検地条目」が綴られていました。これは、延宝年間に上方を中心とする幕府領で実施された検地にあたり、実際現場で検地作業を担う担当大名に対し、具体的な検地方法や心構えなど29か条にわたる定めを与え、統一的で不正のない検地作業の遂行を指示したものです。延宝検地では、幕府の役人ではなく、幕府領が所在する各国内に本拠を置く大名に検地を担当させていますが、まことに厳密な検地仕法を示すことで、大名ごとに検地内容がまちまちにならないようにしたと考えられています。播磨国では、龍野藩脇坂氏、姫路藩松平（越前）氏、明石藩松平（藤井）氏が検地を分担し、三木市域では姫路藩松平大和守直矩が担当しています。本来、民間に伝わることの

ない法令のはずですが、しばしば村方史料の中からみつかることもありました。今回見いだされたものは旧美囊郡域で初めて確認されたものです。

一方、裏側には佐野村の明細書が記されていました。村明細書（帳面仕立てであれば村明細帳）は、作成された時点の村のさまざまな情報が記されたもので、当時の村の実態を探る上でまことに貴重な史料です。今回の佐野村明細書には年代の明記がありませんでしたが、「表」の延宝検地条目とほぼ同時期のものと考えられることと、似た内容のものが久留美村にも伝わっていることから、おそらく延宝5年のものだろうとみえています。久留美村に伝わった延宝5年の明細帳（三木・久留美区有文書）によれば、明細帳作成の事情は、幕府巡見使の通行にあたり、時の領主である幕府代官小野長左衛門が村に提出させたもので、明細書とはいえ情報がやや限定的であることが特徴です。下書きとみられる佐野村の明細書は、久留美村の明細帳と同様に巡見使への提出が作成目的だったと考えられます。

これらの史料については、翻刻や詳しい内容など、近日発行される『市史研究みき』第11号で紹介予定です。ですので、そちらもご参照いただければと思います。

（木村）



写真「検地条目」（上、延宝5年、前半部分）と「佐野村明細書」（下、延宝5年か、前半部分）

市史編さん室が行う「調査」とは？～石造物調査 その3

墓石も立派な文化遺産の仲間 近頃では約 80 年前の終戦時のこともよくわからなくなってきました。ましてや明治、大正時代のことになると、なおさらのことです。そのよくわからなくなりつつある時代の歴史を解き明かすヒントを与えてくれるものの一つに墓石があります。

近年、「墓じまい」が増え、古い墓石が撤去される事例が増えています。江戸幕府最後の将軍・徳川慶喜のお墓も例外でないことをご存じの方も多いかと思えます。そのこと自体は、それぞれのご事情があつてのことですから仕方のないことであると思います。

しかし、私たちにとって最も身近な墓石からは、故人の戒名や俗名、没年、享年などがわかりますが、場合によっては、生前の業績や来歴が石碑に刻まれていることがあり、人物史をテーマにする場合、大いに参考となります。ですから、墓石はその時代を探る上で大切な文化遺産の一つといえるのです。ただし、墓石はお家の方がご先祖様をお祀りするために建立しているものです。訪問する際のマナーをしっかりと守っていただく必要があります。



写真 故人の業績が刻み込まれた墓石（市内）



写真 故人の功績を讃える顕彰碑（市内）

これから石造物調査にチャレンジする方へ 現地調査の際、ノートや個票に翻刻文を転記しますが、解

読ミスの痕跡は、見え消しで修正することをお勧めします。鉛筆で転記中に解読困難な文字に出くわし、書いては消し、書いては消ししつつ、自分なりに結論付けた文字だけをノートに残した場合、後で見直したときに、その文字が間違いであったことに気づくことも往々にしてあります。最初に「こうかな」と判断した文字が実は正しかったということもあり得るのです。そんなとき、最初に判読した文字が残っていなければ、もう一度現地に足を運んでもその文字が思い出せないこともあります。また、石碑の表面がはく落して、解読不能になってしまうケースも少なくありません。

現在、消せるペンが流行っていますが、意識的に消さなくても気温など様々な要因で文字が消えてしまうリスクがあり、お勧めできません。

以前のことで、とある神社境内の苔むした石造品の銘文で、「寶永」なのか「寛永」なのか判読困難なものがありました。見るタイミングによって「寶」に見えたり「寛」に見えたりするのです。ところが、雨上がりの日中に訪れると、文字の部分だけ苔が湿っていたので、みごとに「寶」という文字が浮かび上がり、やっと判読できたことがありました。ノートには「寶」と「寛」が交互にメモされていたことが、今でも思い出されます。

古い石造物から文字を読み取る作業は、古文書を解読することを思えば、比較的容易ですが、やりきることとは何事も困難を伴います。ぜひ、やりきったときの達成感を味わっていただきたいと思います。

（廣井）



写真 墓石の調査に併せ、地元の人から聞き取りを行う事務局スタッフ

《市史の小耳》「どっこいさん」をめぐる仮説

志染町窟屋に「どっこいさん」と呼ばれる多尊石仏^{たそんせきぶつ}があります（現在は三木総合防災公園内に移設）。石材の下部に徳利のような形の石仏^{とくり}が刻まれ、「六地藏」の文字も読み取れます。この「どっこいさん」の呼称について、『志染の歴史』（2021年）では、地元での



写真 現在（右）と移設前（左・矢印の石、1965年）のどっこいさん

呼び方として「どっこいさん」に統一して表記していますが、『郷土断片』三木新聞特集号（1956年）では「ろっこいさん」として紹介されています。するとこれは、『郷土断片』発行から65年の間に「ろっこいさん」から「どっこいさん」へと「転訛^{てんか}」が生じた可能性があります。では、「ろっこい」とは何なのでしょう？

筆者は「ろっこい」のように記された村絵図が古文書があったのではないかと考えています。もし絵図などに「ろっこい」らしき文字が書かれていたとすれば、古文書を読める人なら、一つピンとくるのではないのでしょうか。平仮名「た」の変体仮名^{へんたいが}の一つに「多」を元にした「と」があります。筆で書くとしばしば「こ」に見え、読み間違えることもあり

ます。要するに元は「ろったい（ろくたい＝六体）」だったのではないかと。仏像の単位として「体」が使われることは周知のことで、現に志染谷の北側には「千体地藏^{せんたいじそう}」もあります。「どっこいさん」にたくさん刻まれた仏像のうち、中心は下部の六体の地藏であることは明らかで、もともと「ろくといさま」だったのが、誤読されて「ろっこいさん」、さらに転訛して「どっこいさん」となった…。

いかがですか？ 根拠となる史料はみつかっていませんが、何となく良さげな仮説と思いませんか？（木村）

新三木市史 既刊分好評発売中！！

新三木市史は、既刊分（通史編3冊、地域編8冊）が好評販売中です。市史編さん室（郵送対応可）、みき歴史資料館、三木市観光協会、山田錦の館、市役所内売店たんぼぼ、三木市立中央図書館で販売しています。お問い合わせは、市史編さん室まで（連絡先は、下記奥付をご参照ください）。

〈既刊分〉

通史編

- 第4巻 資料編 古代・中世 ￥3800
- 第5巻 資料編 近世 ￥3800
- 第7巻 資料編 文化遺産 ￥3800

地域編

- 1『三木の歴史』 ￥3800
- 3『別所の歴史』 ￥3000
- 4『志染の歴史』 ￥3000
- 5『細川の歴史』 ￥3000
- 6『口吉川の歴史』 ￥3000
- 7『緑が丘の歴史』 ￥2500
- 9『青山の歴史』 ￥2500
- 10『吉川の歴史』 ￥3500

（いずれも税込み）

古い資料や写真を探しています！

皆さんのお近くにある古い記録類は、地域の歴史を語る大切な歴史遺産です。下記のような資料の情報をお持ちの方は、ぜひ市史編さん室までご一報ください！

◆くずし字で書かれた帳面や一枚ものの文書などの古文書◆明治・大正・昭和の古いノートや記録（日記・手紙など）◆三木市域の古い写真、絵画、映像など◆自治会などの団体、地域でのグループ活動などの記録や資料◆古いふすまや屏風（古文書が、下張りに使われていることがよくあります）etc.

市民ボランティア募集中！

市史編さん室では、市内の文献資料を記録に残す作業を行う市民ボランティアを募集しています。古文書が読めない方でも参加可能です。見学だけでも大歓迎です。詳しくは市史編さん室までご連絡ください。

◆開催日時：毎週水・木曜（どちらか1日の参加でもOK）13:00～15:00／場所：みき歴史資料館2階市史編さん室

活動内容：①古文書のデジタル撮影、②江戸時代以降のくずし字解読（翻刻作成）、③資料の修復（しわのぼし・糊づけ等）、④新聞検索（各紙から三木に関する記事を選別）、⑤古文書現物からの目録作成、⑥パソコンでの目録データ入力

市史編さんだより 第20号（令和8年5月31日発行）

編集発行：三木市総務部 市史編さん室

連絡先：〒673-0432 兵庫県三木市上の丸町4-5 みき歴史資料館2階 電話 0794-83-1120 / FAX 0794-83-1190

ホームページURL：https://www.city.miki.lg.jp/soshiki/9/